

中國國家圖書館所藏の敦煌出土チベット語文書 について（二）

——敦煌多言語社會に關する資料補遺*

Notes on the Tibetan Dunhuang Manuscripts in the National Library of China:
Fragments on Multilingual Communities in Dunhuang

龔麗坤

はじめに

中央アジアは、中西交通の要所に位置し、さまざまな民族や言語が行われた。例えば中國語、チベット語、ホータン語、ソグド語、ウイグル語などが挙げられる。八世紀以降、吐蕃が徐々に臺頭し、中央アジアへの擴張を開始した。チベットの支配下にあった中央アジアの都市のうち、最もその實態を知ることができるのは敦煌であろう。コータン地域やロブ地域で發見されたチベット語文書は斷片的なものが多く、また發見地がチベットの軍事要塞跡であるため、殘存文書の種類に偏りが見られる。しかし莫高窟第17窟から見つかった敦煌文書は格段に完存率が高く、また内容もチベット中央政府の公文書から寫經生の落書きの類に到るまで非常に多岐に亘っている。さらに、同時期の漢文文書も存する。種々の文書が残された敦煌は、チベット支配下における都市の實態を知る上で貴重な資料源である¹。その中でも、最も一般的な言語は漢語とチベット語である。敦煌は八世紀以前の數百年間、中原の王朝によって統治され、漢語が使用されていた。しか

*小文を纏めるにあたり、京都大學名譽教授高田時雄先生に多くの御指導を頂きました、厚く感謝の意を表します。また法成及び敦煌藏文佛經の内容につきまして、復旦大學の任小波教授に何度も教示を仰ぎましたことを、ここに深く感謝申し上げます。

¹岩尾一史「古代チベットと敦煌——チベット史・敦煌史における古チベット語文書の利用」、アジア研究情報ゲートウェイ (<https://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/asj/html/040.html>)、2005年。2024年1月閲覧。

し、786年に吐蕃に征服せられた後、約百年間、標準語は漢語長安音からチベット語に換えられた。武内紹人氏によると、敦煌がチベットの支配下に入ったのは、西暦786年から848年の約60年間であり、その間にチベット語が敦煌の漢人社會に浸透し、契約書がチベット語で書かれるようになり、またチベット風の名前を持つ者も現れたのである²。また、敦煌には他の多くの民族も居住しており、彼らはそれぞれ異なる言語を使用していた。このような環境の中で、多言語を使用する集團が存在し、言語の交流や多言語の使用が行われたと考えられる。文獻の證據は主に二つある。第一に、敦煌で發見されたチベット語やホータン語で書かれた漢語對音資料などは、同時にチベット語と漢語、およびチベット語とホータン語を使用する集團の存在を示唆している。第二に、吐蕃が敦煌を統治していた時期には、政府によって主導された大規模な經典の書寫事業が行われ、その参加者の中には現地の漢人も多く含まれていた。彼らはチベット語で佛典を抄寫するだけでなく、チベット語で署名することや、中にはチベット語の名前を使用する人もいた。

まずは對音資料について述べよう。對音資料に関する文獻研究は古くから行われており、二十世紀初頭には既に初期の東洋學者たちによって注目されていた³。對音資料に関する議論は二十世紀後半に至るまで續き、顯著的な進展を遂げた。この分野における最も包括的な研究としては高田時雄氏の研究があり⁴、その後の氏の一連の研究（「長卷」⁵やその他の散發的な研究を含む）が續いている。筆者も同じ路線に沿った研究を行い⁶、敦煌にかつて存在した多言語集團と社會に関する一連の研究を進めている。特に、これまであまり注目されてこなかった中國國家圖書館の藏文文獻から、關連する資料を探し出すことに意を用いている。

敦煌および中央アジア各地域で發見された對音資料のうち、八割以上は佛教に關連する文獻である。これらの文獻を大別して三類に分け、各類から代表的な寫

²Takeuchi, Tsuguhito, ed. *Old Tibetan Contracts from Central Asia*. Daizo Shuppan, 1995.

³Pelliot, Paul. *Kao-Tch'ang, Qoco Houo-Tcheou et Qarā-Khodja: Avec une note additionnelle de Robert Gauthiot. Extrait du Journal Asiatique* 5-6/1912. ImP. Nationale, 1912; Laufer, Berthold, "Bird Divination among the Tibetans (notes on document Pelliot no. 3530, with a study of Tibetan phonology of the ninth century)". *T'oung Pao* 15.1 (1914): 1-110.

⁴高田時雄『敦煌資料による中國語史の研究——九・十世紀の河西方言』、(東京：創文社、1988年)。

⁵高田時雄「チベット文字書寫「長卷」の研究(本文編)」、『東方學報・京都』第65冊(1993年3月)、380-313頁。

⁶對音文獻についての研究については、筆者の「《十大弟子讚》的藏漢對照本及藏譯本」、『敦煌寫本研究年報』15(2021年3月)、111-136頁、及び「中國國家圖書館所藏の敦煌出土チベット語文書について(一)——敦煌藏漢對音資料補遺」、『敦煌寫本研究年報』17(2023年3月)、227-236頁を参照。

本を擧げてみよう。：

1. 佛教經典の原典

金剛經 IOL Tib J 1404 (India Office 129)

阿彌陀經 IOL Tib J 1405、IOL Tib J 1406、IOL Tib J 1407、IOL Tib J 1408、IOL Tib J 1409、IOL Tib J 1410、IOL Tib J 1411 (India Office 130, ch.77, ii,3)

般若波羅蜜多心經 P.t.448

法華經普門品 P.t.1262

2. 佛教の綱要書や教理問答など

大乘中宗見解

音注本 IOL Tib J 1773 (India Office 93, ch.80, xi)

音寫本 IOL Tib J 1772 (India Office 131, ch.9, ii,17)⁷

絶觀論斷片 BD11564+BD09790

3. 佛教僧團が使用する儀軌や讃・頌・偈など

四分律抄斷片 P.t.1249

道安法師念佛讃 P.t.1253

念珠歌 S.4234

修功德記 P.3346

これらの資料がすべて佛教教團によって使用されたとは言えないが、當時の佛教教團が多言語を使用する集團の中で最も顕著な存在であったと推測される。

⁷これまで『大乘中宗見解』について行われた研究は、基本的に敦煌出土の漢藏對音文獻研究の縮圖であるとも言える。研究の始まりはトーマス、宮本正尊、クローソン三氏の論攷 (F.W. Thomas, S. Miyamoto, and G.L.M. Clauson. “A Chinese Mahāyāna Catechism in Tibetan and Chinese Characters.” *Journal of the Royal Asiatic Society* 61.1 (1929), 37–76.) から、羅常培、財津愛象 (財津愛象「敦煌出土漢藏對音の材料と韻鏡との比較 (其一)」、『東洋學叢編』1 (1935 年)、105–153)、金山正好 (金山正好「大乘中宗見解とその漢藏對音」『大正大學々報』30 (矢吹慶輝博士追悼號) (1940 年)、335–370 頁) に至り、さらに田中良昭 (『敦煌禪宗文獻の研究』(東京：大東出版社、1983)、348 頁)、高田時雄 (『敦煌資料による中國語史の研究：九・十世紀の河西方言』、28–29 頁) に至っている。また、その藏文本に關する研究も長い歴史を持っている。ちなみに、注目すべきは、該當する音注本に「大乘中宗見解義別行本 吳法師」という記述が含まれている點である。この點については、後ほど詳しく説明することにする。

一、『大乘中宗見解』と『絶観論』

特筆すべきは、前述の第二類の佛教文獻についてである。「佛教の綱要書や教理問答など」に列挙された二種のテキスト、『大乘中宗見解』と『絶観論』は、いずれも世に伝わっていない禪宗思想に関連する文獻である。これら二つの文獻のうち、『大乘中宗見解』には漢文本と藏文本の両方が存在し、『絶観論』には漢文本が存在し、チベット文本も存在するとされる（筆者は具体的な確認はできておらず、詳細は後に譲る）。また偶然にも、現在見ることのできる『大乘中宗見解』及び『絶観論』の漢文本には、ともに敦煌の高僧「呉法成」の名が現れている。まずは『大乘中宗見解』と『絶観論』の状況を要約して説明する。

『大乘中宗見解』は問答體を通じて教理の要點を述べる綱要書であり、初期禪宗のいくつかの重要な概念が説明されている⁸。「四大」、「五蘊」、「十八界」、「十二入」、「三寶」、「四諦」、「五乘」などの法數が問答形式で解説されており、インド佛教と漢地佛教（初期禪宗）の融合を示す佛教問答書である⁹。『大乘中宗見解』は、「大乘中觀義（Theg pa chen po dbu ma'i don）」¹⁰の漢譯の要約であって、その内容は吐蕃官編の佛書「大乘經纂要義」における「中觀」の見解を取り入れている。これに類するチベット語のテキスト、たとえば「大乘中觀義」や「大乘中觀義修習法」（IOL Tib J 709）¹¹などは、しばしば禪宗の文獻と共に抄録されている。

『大乘中宗見解』に関連する藏漢對音本には、音注本の IOL Tib J 1773 および音寫本の IOL Tib J 1772 が存在する。一方、漢文本「大乘中宗見解要義別行本」には P.3357、P.4597、S.2944v が存在する。P.4597 の「大乘中宗見解要義別行本」では、佛陀、佛弟子、高僧を讃える讃頌と共に抄寫されており、靈圖寺の比丘または學僧によって抄寫された可能性が高い。多くの題記形式の文句が含まれており、「光化四年九月十五日靈圖寺法□」、「咸通九年正月四日□學生德書卷」などの

⁸F.W. Thomas, S. Miyamoto, and G.L.M. Clauson. "A Chinese Mahāyāna Catechism in Tibetan and Chinese Characters." また宮本正尊『根本中と空』（東京：八雲書店、1943）, 215–290 頁を参照。

⁹金山正好「大乘中宗見解とその漢藏對音」、『大正大學學報』30（矢吹慶輝博士追悼號）, 1943 年 3 月, 335–370 頁

¹⁰沖本克己「敦煌出土西藏文禪宗文獻の研究（1）」、『印度學佛教學研究』（1977 年 12 月）、462–458 頁。「聞思慧による見解分析と修慧による實踐に分つ。以下、二種外道、四種聲聞、獨覺二種大乘の各項に分つて所謂教判を加えるがこの様な教理綱要書は數多く見られ、當時のチベット・敦煌の佛教の特色の一つを示すものである。それは、佛教導入後、短時日のうちに急激にその教義理解の水準を高めたチベット佛教が、一方印度中國兩佛教が混在する状況下で、絶えず教理體系の再確認を必要としたことを示唆するものである。」

¹¹木村隆徳「敦煌チベット語禪文獻目録初稿」、『東京大學文學部文化交流研究施設研究紀要』4（1980 年 3 月）、123–124 頁を参照。

記述がある¹²。藏文本の「大乘中觀義」(Theg pa chen po dbu ma'i don) は、IOL Tib J 706 + P.t.817、P.t.121に見られる¹³。

『絶観論』は、菩提達摩の名によって伝えられる初期禪宗の綱要書の一つ。『三藏法師菩提達摩絶観論』とも、単に『絶観論』ともよばれ、入理先生と弟子縁門の對話形式をとることから、『入理縁門論』の名があり、「観行法爲有縁無名上士集」の尾題をもつものもある¹⁴。前述の通り、これは敦煌から出土した文獻にのみ見られ、傳世文獻には見られない。二十世紀中すでに六種の漢文異本(P.2045、P.2732、P.2074、P.2885、石井光雄舊藏、BD02284)が知られていた。またこれら六種の文獻校定・譯注としては、すでに柳田聖山氏による成果がある¹⁵。『絶観論』の斷片については、ロシアのサンクトペテルブルクに4點(Дх.4259, Дх.5881, Дх.6230, Дх.8768)が発見されており¹⁶、ベルリン＝ブランデンブルク科學アカデミー藏のトルファン文獻からも1點(ch 1433)が見出されている¹⁷。またイギリス藏からは2點(S12208、S12370)が確認され¹⁸、北京藏からも2點(BD 09097、BD11564)¹⁹が見つかっている。

『絶観論』の作者問題については、まだ定説がない。最初、鈴木大拙氏²⁰はその

¹²その寫卷の裏面にある各文書を抄寫順に記すと、次の通りである：「和菩薩戒文」惠□文一本、「西方樂讚文」、「散華樂讚文」、「般舟梵讚文」、「香湯贊文」、「四威儀讚」、「臥輪禪師偈」、「受吉祥草偈」、「大乘中宗見解要義別行本」、「香讚文」、「花讚文」、「遊五臺山讚文」、「辭父母出家讚文」、「義淨三藏贊」釋門副教授金髻、「羅什法師贊」釋金髻、詩(誕跡本西方)、「唐三藏贊」釋利濟、「概(稠)禪師解虎贊」、「釋像幽」、「菩薩十無盡戒」、「金剛五禮文」、「金剛五禮一本」、「五臺山贊文并序」、「五臺山贊文一本」、「寅招禮」、「九想觀詩」、「佛母贊」、「出家讚文」、「菩薩安居息解夏法」、「辭道場讚」(首題)、「請十方賢聖贊」(首題)、「送師贊」(首題)、「勸善文」(首題)、「入布薩堂說偈文」京終南山保德寺沙門懷眞依律本勘定、「受水說偈文」、「聲聞布薩文」、「聲聞布薩文一本」。楊明璋「敦煌文獻中的高僧贊抄及其用途」、《敦煌寫本研究年報》第12號(2018年3月)、27-44頁を参照。

¹³木村「敦煌チベット語禪文獻目錄初稿」、106-107,122-123頁、van Schaik, Sam. *The Tibetan Chan Manuscripts: A Complete Descriptive Catalogue of Tibetan Chan Texts in the Dunhuang Manuscript Collections*. (2014): n. pag.、任小波「吐蕃帝國興佛運動與西藏早期中觀傳統——《大乘經纂要義》以及相關文本研究」、《中央研究院歷史語言研究所集刊》第93本、第2分(2022年6月)、409-458頁を参照。

¹⁴花園大學國際禪學研究所が提供する「禪籍データベース」内の「禪籍解題 43」(http://iriz.hanazono.ac.jp/frame/data_f00a_043.html)から引用、また「禪籍分類要覽」(『新版 禪學大辭典』、大修館書店、1985)を参照した。

¹⁵柳田聖山『禪佛教の研究(柳田聖山集1)』(京都：法藏館、1999年)。

¹⁶中西久味「『俄藏敦煌文獻』禪籍資料初探」、《比較宗教思想研究》5(2005年3月)、61-78頁。

¹⁷Nishiwaki, Tsuneki, et al. *Chinesische und manjurische Handschriften und seltene Drucke*. F. Steiner, 2001.

¹⁸程正「英藏敦煌文獻から發見された禪籍について：S6980以降を中心に(3)」、《駒澤大學佛教學部論集》48(2017年10月)、288-273頁。田中良昭・程正「敦煌禪宗文獻分類目錄：II 語錄類(2)」、《駒澤大學禪研究所年報》22(2010年12月)、350-316頁。

¹⁹田中良昭・程正、「敦煌禪宗文獻分類目錄：II 語錄類(2)」。

²⁰鈴木大拙「敦煌出土達摩和尚絶観論につきて」、《佛教研究》第1卷第1號(1937年5-6月)、

作者が菩提達摩であると主張した。これに對して、久野芳隆氏²¹、關口眞大氏²²によると、これは牛頭法融その人の作品であるとされる。又そのあと、中川孝氏²³によって更めて菩提達摩説が提起された。以上の諸説は、柳田聖山氏によると、「すべてが假説の域を出ない」²⁴と、辛辣に批評されている。柳田氏は、上記の6種の漢文異本を詳細に比較校合し、『絶観論』テキストの三段階の發展過程を提示した²⁵。

1. 『入理縁門論一卷』と題し、「鹿是問頭縁門起決 注是答語入理除疑 是名絶観論」という注記をもつ點で共通。他の版本にはない注記があり、「縁門」の質問は太字で書かれ、その下には細字で二行に分ち書きで「入理」の回答が記されている。合計で15のテーマに關する問答が含まれている。形式上は『入理縁門』または『縁門論』であるが、實際の内容は『絶観論』であり、この特徴を持つ寫本はおそらく最も古い層に屬するものである。さらに、P.2732 號には「貞元甲戌」甘州大寧寺落蕃僧懷生の題記がある²⁶。
(石井光雄舊藏、P.2732)

57-68 頁。

²¹久野芳隆「流動性に富む唐代の禪宗典籍——燉煌出土本における南禪北宗の代表的作品」、『宗教研究』新第14巻第1號(1937年2月)、117-144頁。

²²關口慈光(眞大)「絶観論(敦煌出土)撰者考」、『大正大學學報』30、31合輯(1940年3月)、179-187頁；同「燉煌出土『絶観論』小考——牛頭禪研究の新資料として」、『天臺宗教學研究所報』1(1951年6月)、71-77頁；同「達摩和尚絶観論(燉煌出土)は牛頭法融の撰述たるを論ず」、『印度學佛教學研究』5巻1號(1957年1月)、208-211頁。

²³中川孝「絶観論考」、『印度學佛教學研究』14(1959年3月)、第221-224頁。

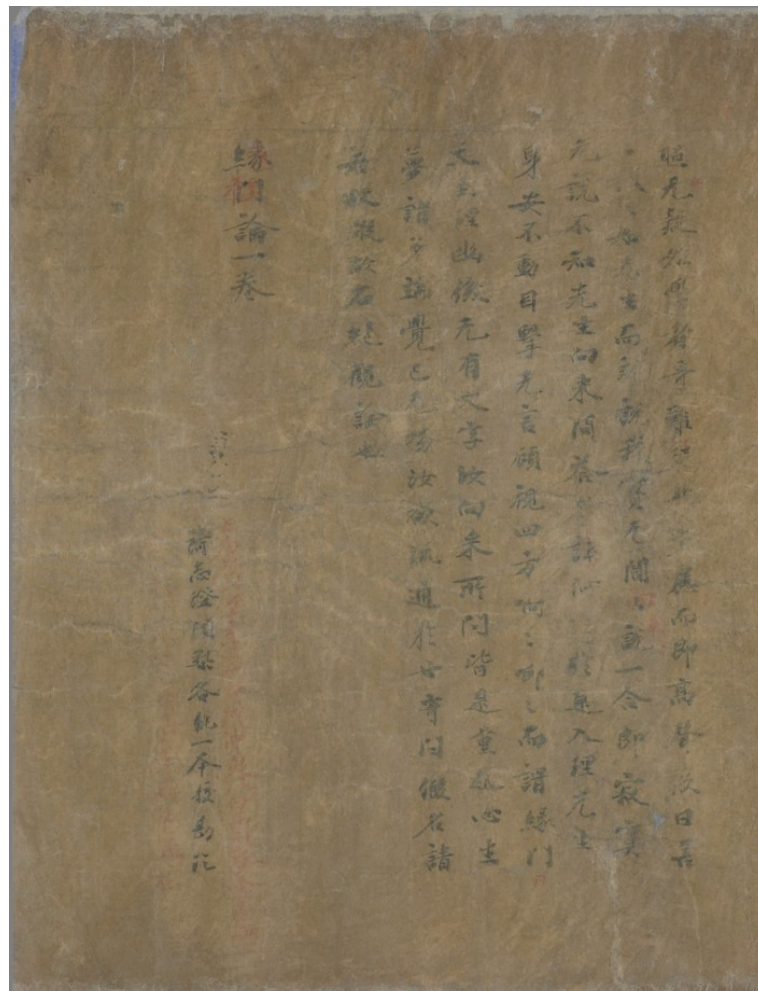
²⁴柳田『禪佛教の研究(柳田聖山集1)』、81頁

²⁵柳田『禪佛教の研究(柳田聖山集1)』、85-133頁。

²⁶「甘州大寧寺落蕃僧懷生」という題記は、これまで學界で廣く引用され、吐蕃統治時期の寫本の紀年に關する議論に用いられてきたが、實際にはこの題記を檢證することは非常に困難である。柳田氏の著作(『禪佛教の研究(柳田聖山集1)』)において、この段落の題記についてのコメントがあり、「ペリオ第2732號の末尾に、貞元甲戌の年號と、甘州大寧寺で落蕃僧懷生が校訂したというコロフォンがあると、鈴木大拙先生が報告されてから、すべての人が不用意にこれを引用している。しかし、現在手元にある寫眞によると、このことは非常に確かではない。恐らくは、他の資料のコロフォンであろう」と述べている。田中氏と程氏による目録(田中良昭・程正、「敦煌禪宗文獻分類目録：II 語録類(2)」)では、柳田氏の發言を引用し、さらに「このコロフォン(奥付)が朱書きされたために、マイクロフィルムの寫眞には現れなかったものであり、コロフォン自体は確かに存在する。ただし、鈴木氏が報告した通りのコロフォンかということ、そこには疑問もあり、この問題については今後の研究課題の一つである」と補足している。筆者はフランス國立圖書館公式サイト Gallica に掲載されている P.2732 の寫本畫像を確認したが、高解像度のカラー畫像であっても、朱筆の題記はかろうじて見えるのみで、題記の録文が正しいかどうかは確認できなかった。また、尾題「縁門論一卷」の「縁門」は朱筆で「絶観」に修正されていた。寫眞によって、この寫卷は最初に墨筆で抄寫され、その後朱筆で訂正されていることが判明している。尾題が實際に「貞元甲戌」(794年)であるとすれば、この寫本の作成年はそれよりも前であると考えられる。

2. 『三藏法師菩提達摩絶観論』と題し、末尾に十三段あまりの問答を加えて、新たに『観行法』という尾題を與える。
(BD02284、P.2045)
3. 卷首に『絶観論』と題し、その下に『菩薩心境相融一合論』(P.2074)の名を有し、尾題に『達摩和尚絶観論』(P.2885)とする。本文は『入理縁門論』に近く、テーマの變るごとに縁門が起って質問したことを明記する點も一致する。
(P.2074、P.2885)

圖 1：P.2732 の巻尾



次に、『大乘中宗見解』と『絶観論』の音注本について説明しよう。

『大乘中宗見解』の音注本は全 128 行から成り、その録文と解説は既に高田氏の著作中に公開されている。首残尾全。音注は一部の漢字にのみ施されており、特に終わりに近づくにつれて音注の数は減少し、全體の漢字数の約半分に相當す

る。特筆すべきは、この寫本の末尾に「大乘中宗見解義別行本、吳法師」という解題が記されている点である²⁷。

『絶観論』の音注本に関して、解説と録文は筆者によって完成され、「中國國家圖書館所藏の敦煌出土チベット語文書について（一）」で既に述べている。『絶観論』音注本は、前述の BD11564+BD09790 である。首尾殘缺。BD11564 は 9 行からなる小斷片で、BD09790 に前接する。BD09790 は比較的長く、兩者合わせて 106 行となる。全部の漢字に音注されているわけではなく、全體の約一割の漢字にチベット文字音注が付けられている。音注のある『絶観論』の殘片と他の漢文本の『絶観論』を比較すると、BD11564+BD09790 の文字は P.2074 と P.2885 の文字に非常に近いことがわかる。一部の誤寫を除けば、ほぼ P.2885 と完全に一致する。ちなみに、P.2885 の末尾には「達磨和尚絶観論一卷。辛巳年三月六日寫記。僧法成。」という題記がある。「干支紀年」は吐蕃支配期以降特有の年號の方式であり、したがって辛巳年は貞元十七年（801 年）、咸通二年（861 年）、後梁貞明七年（921 年）のいずれかと考えられる。法成の經歷を考慮すると、P.2247「瑜伽分門品」からわかるように、現在確認されている範圍では、法成が講義を行った最後の年は大中十三年（859 年）であり、ここでの辛巳年は貞元十七年（801 年）であり、つまり法成の若年であると言える²⁸。

これら二つの資料を音韻の觀點から分析すると、いくつかの長安音の特徴をまだ保持しているが、一部の字音が河西方言に近づいていることも見られ、九世紀吐蕃統治時期前後に作成されたと言えるだろう。これは、敦煌において漢藏對音の實踐が始まったばかりの時期における、いくつかの試行的産物である可能性が高い。

二、法成と敦煌における多言語僧團

法成は、まさにこの時期に活躍した高僧大徳であった。二つの資料が偶然にいずれも直接的または間接的に法成と關連しており、法成が漢語と藏語の兩方に通じていたことから、漢藏對音の實踐にも關與していた可能性が強く示唆される。法成は、敦煌で最も有名かつ大きな成果を残した多言語使用者と言えよう。法成という人物の名は漢文の傳世文獻には現れず、敦煌地域で出土した文獻やチベット文の經典目録にのみ見られる。彼の業績はまず翻譯家として注目に値する。彼

²⁷ 高田『敦煌資料による中國語史の研究:』、28-29 頁。録文は同書 261-270 頁を参照。

²⁸ 柳田『禪佛教の研究（柳田聖山集 1）』、87-89 頁。及び榮新江『華戎交匯』（蘭州：甘肅教育出版社、2008）、90-91 頁。

は生涯で合計 28 種の佛典を翻譯した。そのうち漢文または梵文からチベット文に翻譯したものは 22 種であり、チベット文または梵文から漢文に翻譯したものは 6 種である。さらに、法成は他にもいくつかの文獻を著し、また、敦煌文獻中には、法成の弟子たちが聴講した内容を記録したノートも存在している²⁹。大蕃國の大德三藏法師法成は、敦煌が吐蕃に占領された時代における最も偉大な僧侶の一人と言えるであろう。1908 年、敦煌藏經洞の文獻を調査した際、ペリオはすでに「法成」という人物に注目している。伯希和はそのチベット名 chos grub について、正確に「chos」が「法」を意味し、「grub」が「成」を意味すると推定した³⁰。

その後の學者たちは、敦煌文獻に即して法成の人物と業績についてより詳細な整理を行った。これにより、法成の経歴、著作、講經活動について大まかな理解が得られるようになった。法成の出自に關する問題については、主に 2 つの觀點がある。一つは、法成が漢人であり、俗姓が「吳」であるとする學說である。この學說は日本の學界で最も一般的であり、上山大峻氏がその著作で詳細に解説している³¹。法成の姓「'go」はチベット文の典籍には見られないが、偶然にも漢姓「吳」のチベット文の對音と一致する。この手がかりから敦煌の文獻を考察すると、漢文の文獻「吳和尚邈眞讚」が法成の生涯と對應しており、法成の姓が「吳」であるという假説がより確かなものとなる³²。もう一つの假説は、法成の姓の藏文表記「'go」が、吐蕃の大姓「'gos」と關連があると考えられるものである³³。法成の出自に關する議論は主に、彼の姓氏を巡って行われる。姓氏「'go」について言えば、これは漢字の「吳」から轉寫された姓氏である可能性が高い。なぜなら、現在私たちが持っている敦煌の漢藏對音資料において、漢語から藏文への轉寫では「-s」を含むことはないからである。もし法成の本來の姓氏が藏文の「'gos」であった場合、彼は發音が似ている「吳」という漢名を選ぶことはできるが、漢藏對音に合わせるためにわざわざ姓氏の「-s」を省略する必要はない。さらに、チベット大藏經「カンギュル」(bKa' 'gyur) には、法成による翻譯經典「善惡因果經」が収録されているが、譯注には「zhu chen gyi lo tstsha ba ban de chos grub kyis rgya gar dang rgya'i dpe las bsgyur cing zhus te gtan la phab pa (主校譯師沙門法成が梵文、漢文本をもとに翻譯し、校正し、定めた)³⁴」とあるが、彼の姓

²⁹ 上山大峻「大蕃國大德三藏法師法成の人和業績」、『敦煌佛教の研究（増補）』（京都：法藏館、2012）。

³⁰ Paul Pelliot, “Notes à propos d’un catalogue du Kanjur.” *Journal Asiatique* 4 (1914): 111–150. Berthold Laufer, “Loan-words in Tibetan.” *T'oung Pao* 17-4/5 (1916): 403-552.

³¹ 上山「大蕃國大德三藏法師法成の人和業績」。

³² 上山「大蕃國大德三藏法師法成の人和業績」。

³³ 王堯「吐蕃譯師管・法成身世事蹟考」、『西藏文史考信集』（高雄：佛光出版社、1992 年）、31 頁。

³⁴ 任小波『「善惡因果經」對勘與研究』（北京：中國藏學出版社、2016 年）、6 頁。

氏については記されていない。もし彼が本當に吐蕃の名家の末裔であれば、彼の姓氏は明確に書き留められたはずである。例えば、11 世紀に活躍した翻譯家 Gos lhas btsas のように。また、法成の死後、張球によって作成された「大唐沙州譯經三藏大德吳和尚邈眞讚」(P.4660) にも、「大唐沙州三藏譯經大德」と記されており、これによれば、法成が自らを唐人と認識していた可能性はさらに高まる。一方で、藏文文獻において「go」と單獨で法成を指す例はほとんど見られないが、漢文文獻では「吳和尚」(P.4660、ならびに BD14676「咸通六年正月三日奉處分吳和尚經論」) や「吳法師」(IOL Tib J 1773『大乘中宗見解』) と稱されることが一般的である。これは、當時別に同姓で高名の「吳和尚洪誓」が存在していたにもかかわらずである。

また、注意すべき点として、署名が「僧法成」となっている P.2885 の背面には『十哲聲聞』というテキストがある。そして、『十哲聲聞』は莫高窟第 14 窟(晩唐時代)の『題記』にも見られ、これは「十大弟子讚」と同じ系統の佛教讚頌文である。以前にも述べたように、「十大弟子讚」には漢藏對照本とチベット語譯本が存在する。

敦煌文獻における「法成」という僧名については、同名の存在を考慮する必要がある。敦煌文獻の調査結果から、時代的に見ると、「法成」はおそらく二人存在していたことが分かる。一人目は先述した大蕃三藏法師法成であり、9 世紀中頃から後半にかけて活躍していた。もう一人は 10 世紀中頃(約 940 年から 970 年頃)に主に活動していた法成であり、翻譯家法成とは約 100 年の時間的な差があり、おそらく別人であると考えられる。後者は著作を残しておらず、經濟文書にその名前が散見するのみである。BD16029「周家蘭若禪僧法成便麥粟曆」(957–959)、S8443「李闍梨出便黃麻曆」(944–947)、BD03441 (961)を参照。その活動時期は本文で議論されている時期とはかなり異なるため、本文で議論されている P.2885 の文書に現れる法成はおそらく「大蕃三藏法師法成」のことであると推測することできる。

以下、筆者は中國國家圖書館が所藏する吳法成に關連する斷簡、すなわち BD 14676「咸通六年正月三日奉處分吳和尚經論」について紹介したいと思う。これは法成の遷化後、靈圖寺の責任者である僧侶が、法成の遺物を點檢し記録した文書である。この文書は許貞幹の『味青齋敦煌祕籍遺卷存目』³⁵に「靈圖寺藏經目錄 咸通六年」として記載されており、したがって許貞幹の舊藏であると思われる。この許氏舊藏の大部分は現在中國國家圖書館善本部に保存されている。中國國家圖

³⁵蕭新祺「佚名『味青齋敦煌祕籍佚卷存目』」、『敦煌研究』1991 年第 4 期(1991 年 12 月)、67–69 頁、李際寧「味青齋敦煌祕籍佚卷存目點勘及其價值」、『敦煌學輯刊』總第 27 期(1995 年 6 月)。

書館善本部の敦煌遺書入藏登記帳簿と、文化部文物局の「文物移交證」の記録によると、この遺書は1955年末に文化部の羅福頤氏によって點檢され、入藏前に趙萬里氏が全て目を通し、善本部に保管されることとなり、1956年7月に正式な移交手續きが行われた。中國國家圖書館は、この遺書の状態に基づき、それぞれ「新」番號と「簡編號」に分類している。

この寫本の正面に關する研究においては、方廣鎬氏³⁶や上山大峻氏³⁷の價值ある研究が既に行われている。彼らの研究から、いくつかの事實が明らかになっている。第一に、法成が入滅した時期は咸通六年（865年）以前であることがほぼ確實であり、彼の晩年は沙州の開元寺で「瑜伽師地論」を講じていたものの、遺物は靈圖寺に残されている；第二に、吐蕃統治時期に龍興寺の地位が高く、歸義軍の初期に靈圖寺の地位が向上していたこと；第三に、「吳和尚」が「'Go Chos grub」と對應することが再確認された。

この中國國家圖書館に所藏されているBD14676の背面には、4行の藏文が記されており、これまで研究者によって公開されたことはない。以下、これを抄録し轉寫する。

1. dmyal bar 'byang nas brgya la myir skyes na yang dbul chal skye ste ma'i
lhun nas dmus long tu gyur //
2. de nam lha 'i bu shin tu brtan bsgra de thos nas 'jig cing sgrug nas lus
spu zings ste shin
3. tu myi dag bar gyur // myur tu rings par lha'i dbang po brgya byen gan
shums nas 'jigs
4. ste 'go bos brgya byin rkang pa la phyag

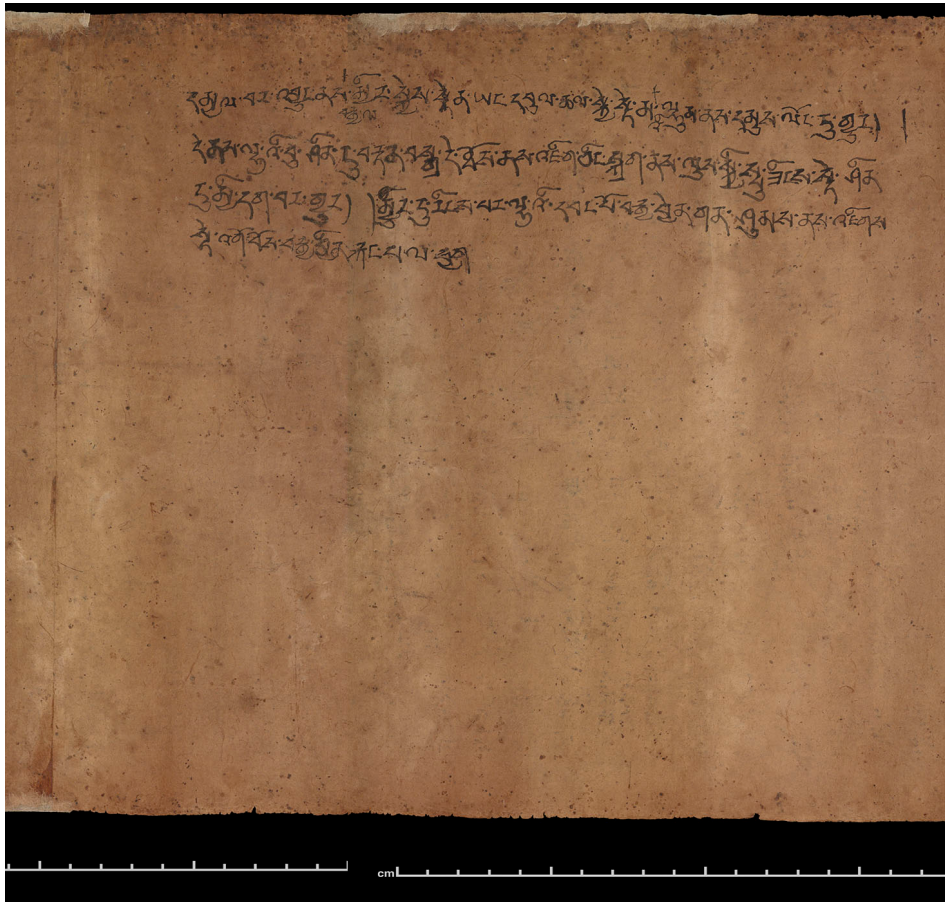
このテキストは大まかに以下のように翻譯することができる：

地獄を出た後、人間の身を得ても、依然として貧困の苦しみに苦しみ、生まれながらにして盲目となる。そして、その言葉を聞いた天の子は堅固になり、知らず知らずのうちに體毛が逆立ち、完全に變わってしまった。突然、神の偉大な力によって、百の存在が一齊に現れ、恐怖を引き起こし、天の子は膝に手を伸ばして敬意を表した。

³⁶方廣鎬「關於敦煌遺書北新八七六號」、『九州學刊』第6卷第4期（1995年3月）、71-88頁。

³⁷上山大峻「吳和尚藏書目錄（效76）について」、『日本西藏學會會報』第41-42號（1997年3月）、3-9頁。

圖 2：BD14676 背面の藏文テキスト



しかし残念ながら、この寫本の背面の内容は法成とは関連がなく、靈圖寺の僧侶や関係者が、當時流行していた「十善業道」に関連する經文の段落を文書の裏面に抄録したものであると考えられる。

BD14676 には『絶觀論』や『大乘中宗見解』が記載されているわけではない。しかしながら「靈圖寺」という手がかりを通じて、先に示された P.4597 との関連から類推すれば、同時期の僧團内で學僧が『大乘中宗見解』を抄録していたことが明らかになる。これは該文獻が、この時代に一定の流行を見たものであり、僧侶に學ばれていたことを示している。この點から推測すると、敦煌の漢藏對音文獻に含まれる佛教テキストは、この期間にこれらの僧團で使用されており、その使用目的は講義に関連していた可能性がある。

おわりに

引用された文獻情報から推察すると、多言語使用者であった法成とその僧團は、敦煌の漢藏對音文獻と深い関係があると言える。漢語をチベット文字で記録する

始まりについては、情報が不足しているため現時点ではっきりと結論し得ないが、おそらく9世紀中頃のことと推定される。また、9世紀中期から後期にかけて、法成を中心とした敦煌の佛教僧團は漢藏對音という方法を使用していたことがわかる。したがって、法成は敦煌や中央アジアにおいてチベット文字で漢文を書くことを推進するに当たっての重要人物であったと考えられる。

(作者は京都大學文學研究科博士後期課程)